

はじめに

「父の居場所がなくなった」と言われて、久しい時代になりました。

わが国四六〇〇万世帯のうちに、何人の「現役の父」「現役の夫」がいるのかわかりませんが、かつてのように威厳ある父、かみなり親父、頼りになるお父さんと呼ばれる父親が、とても少なくなったように思います。

夕食も家族めいめいにいたたく家庭が増えているようです。テレビを中心にした夕餉に、家族の語らいはなく、食事を済ませた子供はさっさと自室に引きこもってしまう。そして子供がいなくなった食卓に夫婦の語らいさえなく、テレビニュースのアナウンサーの声だけが響きわたる、寂しい家庭も少なくないと聞きます。

わが家には経営コンサルタントを努める愛しい妻と、ベンチャー企業に勤める娘、そして私立高校に通う息子がいます。その妻や子供が、夫であり父親である私を、どのように見ているのか、ときどき不安になることがあります。

私は脊髄の難病が原因で、車いすを利用する身体障害者の父親です。車いすに乗った目の高さは、低学年の小学生ほどの一二〇センチしかありません。



これは一家の主として、夫として父として、ひとつの負い目であることは確かです。日本全国に一七〇万人いるといわれる肢体障害者の中で、さらにその内の現役世代の中で、おそらく本当に数の少ない現役の父親です。

私は中学一年生のとき、父を病で失いました。しかし片親でしたから、父と一緒にどんな苦勞も乗り越え、父と一緒に小さな喜びを分かち合っていました。

父が亡くなって、もう四〇余年が経ちますが、大好きだった父は、私自身が子供たちの成長を見つめる「父の眼差し」の、何者にも替え難いものさしとして、今も私の胸の中に生き続けています。

平成一七年秋

著者

父からの伝言・もくじ



はじめに ————— 3

第一章 少年時代の軌跡

共有した時間が命に刻み込まれる ————— 10

納屋暮らしまでを楽しんでしまう ————— 13

父の知らないところで ————— 17

田園地帯で本領を発揮 ————— 23

バナナにこめられた思いやり ————— 32

はじめての万引き ————— 36

ドヤ街の長欠児童 ————— 42

山谷学 ————— 46

父から受けたたった一発のビンタ ————— 50

親子兄弟の語らい ————— 55

父の誇り回復を願った頃 ————— 59

第二章 青春時代

人のために祈れる素晴らしさ ————— 64

父からの伝言 ————— 70

命を磨いたいじめ体験 ————— 74

イデオロギーかビートルズか ————— 78

我以外皆我師 ————— 86

企業内起業家 ————— 92

「冗談だろ?」と受け止めた病気 ————— 98

小さな出会いを粗末にしない ————— 102

仕事と治療のパラドックスに悩む ————— 108

身体障害者判定 ————— 114

第三章 父として生きる

ありがとう ————— 120

大阪の人々 ————— 124

娘の叱咤 ————— 129

父親失格を意識できるか? ————— 135

自分で治すなら「自分こそ先生」 ————— 144



第四章 一人のために

1%の可能性を信じた | 150

はじめて知った人の苦しみ | 158

陽はまた昇る | 164

わが子に伝える親父の味 | 175

どういたしまして! | 187

親父復権の時代到来 | 198

あとがき | 204

●スタッフ●

— 編集長

佐田 満

— 構成

佐田 満

— 表・カバー

Yukiko

— 画像処理

デザインオフィスはな

— コピー

宇田川森和

第一章 少年時代の軌跡

第一章 少年時代の軌跡

共有した時間が命に刻み込まれる

多くの出会いの中で、文字にはできないお話をうかがうことが、たびたびあります。大阪のある町で、保護司を努める女性からうかがったお話の中に、こういうものがありました。

「家庭の中こそが、不幸な犯罪を防げるもつとも重要な場所ではないかと思えます」

この保護司は、犯罪を犯してしまった少年少女へのひんばんな家庭訪問、個人指導を繰り返し、「一人を思う気持ち」を根幹に、家族そろっての再起を祈っています。

「もつとお母さんが徹底的に子供の話を聞き、思いきり愛情を注げる時間を作ってほしい。思春期の母親とのふれあいが最高の未来への道しるべだから」

女性の保護司という立場から、どうしてもその視点は、子供と触れ合う時間が多い母親へと向いています。

しかし、子供を立派な成人へと育てるのに、父親が手をこまねていることはないで

しょう。父親も大人の男として、もっと子供の成長に関わるべきだというのが、父の私たちの育て方でした。そして父の子供である私の、子育てに関わる強い思いです。

私の父は終戦と同時に南方戦線から帰り、終戦後のカネヘン景気に乗って小さな機械会社を設立し、こじんまりと成功していた男だったようです。私が生まれた当時の神奈川県茅ヶ崎市の東海岸という街は、こうした成功者の広大な屋敷が建ち並ぶ、閑静な住宅街でした。

この家の長男として生まれた私は、母方の母（祖母）と妹（叔母）に囲まれて、とてもおとなしい子として、女の子のように育てられたようです。

父は会社を経営していたのですから、そう暇な時間があったわけではないでしょう。しかし飼った犬の散歩だけは、女性軍にまかせず、私と父の日課としていました。

早朝、幼い私を自転車に乗せ、鎖でつないだ犬を連れて、湘南遊歩道を走るので、朝の潮風を、胸一杯に吸い込みながら、茅ヶ崎球場前から西浜を経て馬入川まで走り、砂浜で犬を遊ばせてきました。

広大な水平線、烏帽子子岩の向こうにうつすら浮かぶ大島、東には江ノ島が望め、西には丹沢から箱根に連なる山の端が真鶴岬に下って海に流れ込む。その上には威風堂々たる富士が見えます。

砂鉄をたっぷり含んだ黒ずんだ砂浜と、延々と連なる松の緑、これが幼い私にとってのランド・スケイプでした。

そしてその真ん中には、いつも私に向かって笑みを投げかけ、両手を広げる父の姿がありました。

朝食、夕餉ゆうげの食卓には、記憶にある限り、必ず父の姿がありました。家にいないことも、帰りが遅くなったこともあるのですが、父のいない食卓は、昼食以外に記憶がありません。それほど存在感が大きかった父。いつも家族の真ん中において、母や祖母と一緒に、私を笑顔で見つめていました。

休日には薪を割り、庭に生ゴミを捨てる穴を掘り、家族の中できちんと男の役割りを果たしていました。

自分にとって「父親とはかくあるべし」というモデルは、幼稚園に入る前のこの数年間に、命に刻み込まれたことになります。

「子供を遊ばせる」などといった、あたかも家事の分担であるような関わり方をすべきではありません。

子供が父親と、あるいは母親と共有する時間は、子供の命にしっかりと刻み込まれません。

残念なことです。非行に走ってしまう少年少女の子供時代に、どのような親子ふれあいのシーンがあったか、想像するのに難しさはないように思えます。

納屋暮らしを楽しまでしまじ

茅ヶ崎という町は不思議な町でした。

今となつては随分様変わりしてしまいましたが、私が生まれ育つたような閑静な住宅街もあるかと思えば、海沿いには漁師を^{なりわい}生業とする家々が建ち並び、駅から遠く離れた海岸沿いには公共住宅が建ち並んでいました。商業を営む人々は、主に駅のまわりや国道沿いに集まり、国道の北側には勤め人の住宅が多かつたように思います。

私が入園した幼稚園はキリスト教系の幼稚園で、ご近所のお屋敷から通う子弟が多かつたのですが、小学校にはさまざまな家の子供が通っていました。茅ヶ崎に小学校は六校あつたのですが、私が通つていた小学校は駅の近くにあつて歴史も古く、生徒数は三七〇〇人のマンモス小学校でした。

一クラスに六〇人ほどが詰め込まれ、学年によっては十三クラスありました。

この学校へ入学した一学期に学級委員を務めることになつたのですが、この頃の私はすでにお屋敷から通う坊ちゃまではありませんでした。

子供の耳に聞かされなかつた事情は未だに不明なのですが、弟が生まれて間もなく、わが家に数人の男が押しかけ、家にある家財という家財すべてに赤い紙を貼つて帰りました。

父のいないわが家は大パニックに陥りました。厳密に言えば、母も叔母もおらず、祖母と私たち兄弟だけが、指をくわえて、この様子をただ眺めていました。

住む場所を失った私たちは、ご近所の地主さんの敷地にある納屋へ、地主さんのご好意で移り住むことになりました。

このとき母と叔母は、祖母と私たち兄弟を置いて、家を出てしまいました。本来でしたら祖母も母と一緒に家を出る気持ちはあったのですが、幼い私たちを見捨てることができなかったようです。

納屋……つまり物置小屋です。農機具や穀類の保存、不要な家財をしまっておく小屋のことです。人間が住むためには作られていません。壁と屋根、入り口の破れかけた扉はありますが、床や天井はありません。

もちろん窓もなく、電気も水道も釜戸もありません。

幸いそのとき納屋にしまわれていた物はなにもなく、父は近所の建設現場などから廃材を集め、部分的にはありますが、なんとか床らしきものを作り上げていました。

納屋の中央の土間と、納屋を出たところに、ブロックを積み上げて「釜戸」らしきものをこしらえ、ここで炊事をしました。水は井戸からバケツで運び、トイレは母屋の離れにあるものを使わせていただきました。キャンプの飯ごう炊飯みたいなものです。

古新聞につけた火を枯れ枝に燃え移し、これを薪替わりの廃材に移します。木炭や練炭などは、なかなか手に入りませんでした。今でも河原などでバーベキューをするとき、

火をおこすのが一番早いのが私です。ボーイスカウト出身者以上でしよう。

灯りはろうそく一本です。

仏壇の灯明と違って、つけている時間が長いので、ろうそくの消耗スピードは、とても早いものでした。溶けて固まった蠟を、鍋で溶かして竹筒に流し込んで成型し、ボロ布で芯を作って、リサイクルろうそくを何本も作りました。ただリサイクルろうそくは、一度二度ならきちんと火がつくのですが、何度かリサイクルしていると、ほんの小さな炎しかできないことがわかりました。

燃料は最初のうちは近所で出る建築廃材を使っていたのですが、そうたびたび入手できるものではありません。

燃えるもの……燃えるもの……とあたりを見回して見つけたのが、海岸沿いに延々と続く松林から出る枯れ枝と松ぼっくりです。松ぼっくりならほぼ無尽蔵に入手できます。国立公園ではありませんから、拾って帰ってもお咎めなしとがです。

ただ、松ぼっくりの採集には、ものすごい危険がつきまといまいます。毛虫です。何度背中を毛虫に刺され、かゆみと痛みと、アンモニアの刺激のために泣いたか知れませんが。

薪と違って火力が弱い上に、出る煤すすの量は半端なものではありませんでした。納屋の内壁や数少ない家財が、あつという間に黒光りするようになってしまいました。

納屋に入居（？）したばかりの頃、父が半紙を切って備忘録を作っていました。

私たち兄弟の迷子札のようでもあり、親戚の住所録のようでもあり、父の日記帳のようでもありました。

学校でロビンソン・クルーソーを習っているところでしたので、ちょっとサバイバルな感じの、この備忘録は気に入っていました。

私が入っていると知ると、父はこの帳面を私と共有し、私にも書き入れることができるような細工をしました。

「かわいいだろう？」と言いながら、拾ってきたお芋で彫った芋判で、表紙にネズミの判を押し、その脇に歌（？）らしきものをしたためました。

「煙が目にしみる。男の勝手らくじゃない」
こんな無邪気な父が大好きでした。

松ぼっくりに火をつけ、立ち上る煙に涙を流しながら「煙たいね」と、キャツキャツ喜んでいました。

破産と一家離散の直後だというのに、こんな貧乏までも楽しんでしまえる男は、そうざらにいるものではありません。

父の知らなごころ

環境がきわめて悪い納屋での生活でしたから、病身であった祖母がついに寝込んでしまいました。太陽の光も差し込まず、空気はよどみ、水もトイレも近くにないのですから、当然だったのかも知れません。

もともと表舞台で華やかに活躍するようなタイプではない祖母でしたが、勤めには出て行くものの、少しもお金を家に入れない父にかわり、債権者の目をくすねては持ち出した着物を質屋に入れては、小金を用意していました。

ですから祖母が寝込んでしまったことによって、わが家にはお金がまったくなくなっていました。

さらには寝込んでしまった祖母の汚れ物洗いをはじめ、掃除、炊事といった、おさんどんが小学校二年生の私の仕事になってしまいました。

当時、私の通っていた小学校は、生徒をすべて収容できる教室が足らず、二部授業が行なわれていました。戦前に建てられた通称ボロ校舎で、午前午後に分かれて生徒が通学するのです。お陰様で要領の悪い私たちには、おさんどんの時間が、たっぷりできました。

母屋の近くにある井戸で水を汲み上げては運び、洗濯板と亀の子石鹸を使って、タラ

イで汚れ物を洗います。後日NHKテレビで「おしん」を見たときに、なんとなく共感を覚えたものです。「大変だよね」って。

いい加減、貧乏暮らしには慣れていましたが、学校で給食費やPTA会費が払えないことは、いやなものでした。わが家の事情を良く知るはずの担任の先生は、ほかの子供の手前もあるのでしょうか、事務的に給食費袋やPTA会費袋を私に持ち帰らせる人でした。

持って帰ったところで、袋にお金が入るあてはありませんでしたから、袋がランドセルの外に出ることはありません。なのにわが家の近所の、お宅の娘である担任は、わが家の事情を知らながら、集金日になると、平気で私の前に手を出しました。

何度「忘れました」と、屈辱的なうそをついたでしょうか。

しかし何度忘れたところで、コッペパンと脱脂粉乳の給食は食べさせていただくことができたのですから、日本の義務教育はありがたいものです。

ただ、当時有償だった教科書は、どう逆立ちしても買うことができませんでした。

これを父に訴えますと、「友達から借りてきなさい」と言いました。

借りてきた教科書を、父は一晚かけてわら半紙に書き写し、ヒモで袋とじにして私に持たせました。父が書いた習字の教科書はとても使えたものではありませんでしたが、見た目あきらかに同級生の教科書よりも見劣りがするこの教科書を、私は最高の誇りに思って使っていました。

三七〇〇人もの生徒がいても、父親手作りの教科書を使う生徒は、知る限り私ただ一人だったはずですよ。国語も算数も理科も社会も、図工も音楽も、私はこの教科書で、堂々と勉強しました。先生も、これにはなにも文句を言いませんでした。

ろうそくの灯火の下で、手作りの教科書で勉強をする私に、父は一生懸命勉強するということを教えてくれました。私も終業式の夜には、「5」が並んだ通信簿を得意になって父に見せていました。

しかし貧しさだけはどうにもなりませんでした。

祖母が寝込んでいるにもかかわらず、祖母をお医者さんに診せることもできず、滋養さえつけてもらうことができません。

お米の配給通帳も差し押さえられてしまいましたので、たとえ少々のお金があっても、お米すら買うことができません。麦、干しうどん、すいとんが主食でした。

とてもいやなことだったのですが、祖母からしばしば親戚の家に行くことを命じられました。麦ご飯の主役であるお米を借りに行くのです。

現在と違って、電話や宅急便が当たり前にある時代ではありませんでしたから、電車の賃の安い私が一人で、湘南電車に乗って、小田原や箱根に住む父の姉たちの家を訪ねるのです。

どの家も配給で買えるぎりぎりのお米しか持っていないから、私に一升なり二升なりのお米を貸してしまうと、その家のお米が足りなくなってしまう。

「そんな米はないよ、帰りな」と言われます。

「博（父の名前）は何やってんだ？」

「帰れ」と言われても帰るわけにはいきません。遠いところを心細い思いをしながらたどり着いた、親戚の家での冷たい応対に、立っていることさえできぬほどに体中の力が抜けてしまいます。

芝居ではなしに、まさに腰からへなへなと崩れ落ち、涙を流している私を見れば、誰だって平常心ではいられなくなります。

伯母たちは「うちの父ちゃんには内緒だよ」と言いながら、「少しで悪いんだけどさ」と、いくらかの米を布袋に入れて持たせてくれます。


「ちよっと重たくなるけれど」と言いながら、みかんや、寒天を持たせてくれたときなどは、本当にうれしくなりました。

「おばちゃん、ありがとう」

こう言いながら、二度と同じ用事では来ないぞと心に誓うのですが、その後も二度三度と繰り返すことになり、心はずたずたに疲れてしまいました。

さらに学校が休みの日には、浜で漁師の引く地引網を手伝いました。漁師ばかりでなく、近所の大人も一緒に数十人で引くのですが、これは大変重たいものでした。

運動会の綱引きどころの重さではありません。しかし綱につけたブイが、だんだん浜に近づいてくる様子には、学校や家では味わえない喜びを感じました。



網があがると、樽を使って漁師が魚の仕分けを始めます。急深でかけあがりの砂地の海ですから、アジ、サバにまじってキスやヒラメ、スズキ、クロダイなど、大変魚種の豊富な網であったように記憶しています。

近所の大人たちは、この中から型の良いアジやサバなどを、格安の浜値で仕入れていきます。私たちは網からこぼれた小魚を、バケツに拾い集め、波打ち際で洗って持ち帰ります。

ネコさえもまたいで通るような小魚を拾い集めていても、子供の水遊びぐらいにしか見られていなかったでしょう。誰も私たちのやることを咎めたりはしませんでした。

この魚を納屋に持ち帰り、ブロックの釜戸でゆがいていただきましたが、とてもおいしかったことを覚えています。ちよつと大きな魚は、うどんを作るときのダシとして使いました。

父の知らないところでのこうした苦労を、父が知っていたかどうかわかりません。また、父は家にお金を入れぬことをさしたる問題ではないと思っていたようです。ある意味、非社会的であり、非家庭的な父でした。

父本人は毎日東京へ出ては、事業の再起に向けた下準備に夢中だったのでしよう。帝国大学を卒業し、陸軍将校、社長を経験してきた父にとっては、安月給のサラリーマンなど眼中になかったのでしょうか、家にいる子供たちは祖母にまかせておけばと、一任していたのだと思います。



父の存命中に、残された家族の生活実態を教えてあげられなかったことだけは、残念だ
ったと思っています。